

「認知症カフェの類型と効果に関する調査研究」報告書（概要版）

わが国の認知症カフェは、新型コロナの影響を受けながらも、地域で運営に携わる方々や関係者の理解と尽力によりかけがえのない地域拠点として確かに広がり浸透してきた（2021年7,904ヶ所設置）。調査結果からも、わが国独自の価値と意味を持つことが明らかになっている。その結果を以下のように整理した。

1. 事業の目的

本事業は、平成28年度（2016）に実施された大規模全国調査の追跡調査を行い、わが国の認知症カフェの現在地の確認および10年目の総括、加えてコロナ禍からのリスタートへ向けて、今後の継続的かつ効果的な事業運営と評価等に役立つ基礎資料を得ることを目的に実施した。そのうえで、検討委員会において、今後の認知症カフェのさらなる普及・促進、および運営指針となる「認知症カフェのビジョンと類型」を作成し提言した。

2. 調査概要

目的達成のための次の事業を実施した。

市区町村への認知症カフェ状況調査	対象者：全国の市区町村認知症施策担当者 配布回収：配布1,741件、回収1,153件（66.2%） 内容：認知症カフェの支援状況、目的、課題、評価方法等
認知症カフェ運営者への実施状況調査	対象者：全国の認知症カフェ運営者 配布回収：配布7,058件、有効回答3,659件（51.8%） 内容：認知症カフェの状況、課題、目的、成果、相談内容、評価方法等

3. 調査結果の概要：認知症カフェの現状（運営者調査結果）※詳細は報告書3章

- ①開催場所 全体では、医療・介護関係施設38.1%、その他の施設が76.3%であり地域の公共施設で開催する割合が高い（複数回答）。特に、コミュニティセンターや自治会館等の地域公共施設が25.3%でもっとも多い。
- ②運営団体 地域包括支援センターが39%でもっとも多く、次いで市区町村認知症担当課15.2%、グループホーム10.7%と続く。介護保険施設での開催は減少。
- ③参加費 無料が40.7%、その他は有料である。金額は平均で177.1円で、100円が最も多い。
- ④開催頻度 定期開催が88.6%、月平均1.43回、月1回開催割合は72.3%である。開催時間は平均107.9分。最も頻度が多い場合、毎日8時間開催というカフェもある。
- ⑤参加者の属性 制限なく誰でも入れるが89.2%でもっとも多い。なお、認知症の人の認知症の程度は、認知症が心配な方、MCIやごく軽度の方が41.4%でもっとも多い。内訳は下記の通り。

属性	平均
認知症の人	3.05人
家族介護者	1.84人
地域住民	5.96人
専門職等	1.78人
合計平均	13.21人

- ⑥運営者属性 専門職は平均3.52人、地域住民は1.31人。属性は介護支援専門員が54.4%、社会福祉士43.8%、介護福祉士40.5%の順で多い（複数回答）。
- ⑦プログラム カフェタイムが70.7%、アクティビティが69%、ミニ講話54.4%、認知症予防53.1%の順で多い。力量配分ではカフェタイム、アクティビティの順。
- ⑧運営費 財源は参加費48.6%、自治体からの助成等48.8%で同等（複数回答）。開設資金額は平均15万4千599円、年間運営費平均は11万9千873円であった。
- ⑨運営上の課題 認知症の人が集まらない76.7%、将来的な継続60.2%、全般的に不調57.1%の順で多い。
- ⑩必要な支援 研修会での市民への周知80%、広報誌等への掲載周知75.8%、財政的な支援67%の順で多い。
- ⑪相談内容 認知症カフェで受ける相談内容の多い内容は下記の通り（複数回答）。

相談者	内容
認知症の人から	自分自身の健康に関すること 45.3% 認知症の症状に関すること 41.5%
家族介護者から	認知症の症状への対応に関すること 62.6% 介護の精神的負担に関すること 48.7% 介護保険サービス内容・選択に関すること 44.4%
地域住民から	認知症の知識に関すること 44.8% 認知症予防に関すること 43.6% 認知症などが気になる人に関すること 40.2%

4. 認知症カフェの現状と課題解決に向けて ※詳細は報告書3章、4章

- ・2016年と比較し現在の認知症カフェは、行政の支援協力の増加、地域開催の増加、規模の縮小の傾向。
- ・認知症カフェの地域化の伸展の一方で、小規模自治体の支援不足と認知症カフェの特徴の薄弱化があり、啓発や周知と継続の支援が求められる。
- ・認知症カフェの構成要素は「地域交流の拠点」「認知症の理解・情報交換」「認知症早期支援体制の構築」の3因子であることが明らかになった。これらが明確になることで効果を発揮することができる。
- ・運営上の課題は、認知症の人不在、継続の不安、小規模自治体の支援不足などがある。
- ・認知症の人の参加促進には、地域の公共施設での開催、地域住民が加わることで、認知症の本人と家族が別々で話しができる環境、認知症一次予防を行わないことである。
- ・認知症カフェの安定的継続には、運営への地域住民参画、ミニ講話の実施、施設以外の開催、ゆっくり話をする時間の確保である。

5. 認知症カフェのビジョンと類型 ※詳細は報告書2章

検討委員会による議論を重ね、「2章」に、ビジョンと類型として整理した。これは、認知症カフェ運営に携わる関係者、推進を図る市区町村自治体担当者の運営および推進の指針であるとともに、来場者である認知症の人、その家族、地域住民への認知症カフェのプレゼンス向上を図るための類型、および運営ポイントなどを含める内容である。

6. 認知症カフェの主たる内容と類型（委員会提言）※詳細は報告書2章及び次ページ骨子

- ①情報提供や学びを大切にされた地域交流拠点のタイプ（それぞれ運営者、場所、内容と目的で異なる）
- ②特にプログラムは用意されていない地域交流拠点のタイプ
- ③地域の中で、家族と本人サポートを中心に行われるタイプ

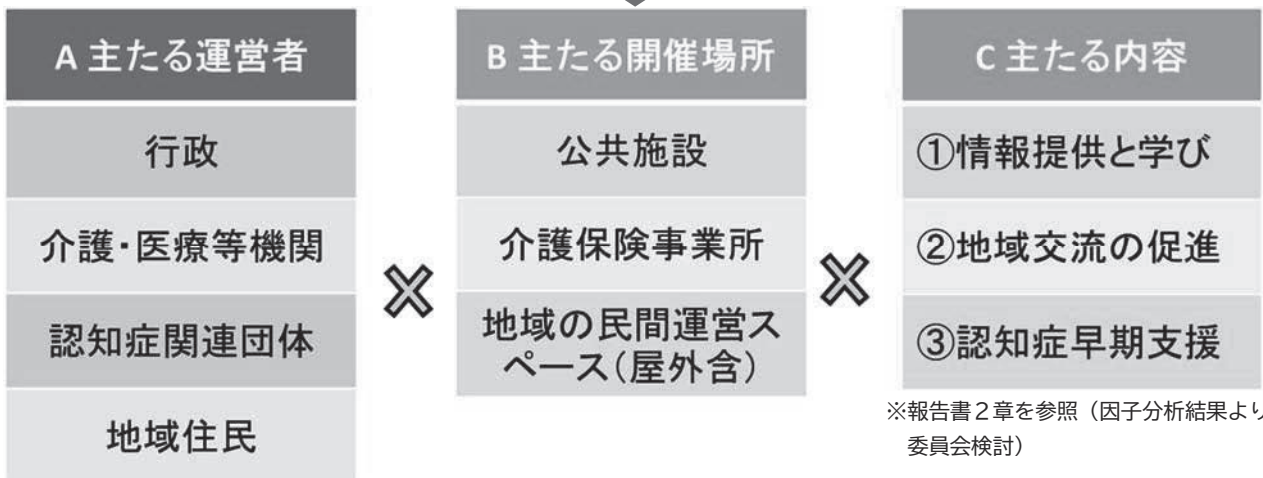
類型化の骨子

認知症カフェのビジョン

認知症カフェは、認知症のご本人があらためて人や地域と出会い、すべての人が認知症の深い理解（学び）につながる機会を作ることを目指している。そして、認知症カフェとは、認知症であってもなくても、だれもが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる「共生社会」実現のためにある。そのため、認知症ではない人も身近に自分事として認知症について考えるきっかけの場であり、多様な所属や属性の人々による運営を基盤として地域の中で開催される。したがって、次の要素が含まれていることが求められる。

ビジョン達成のための要素

- ① 認知症の人への配慮がなされ、だれもが安心して入りやすい環境や場所で開催されること
- ② 認知症の人やその家族、地域の方、専門職が同じ立場で参加し出会い交流すること
- ③ 認知症の理解促進・偏見の払しょくにつながる情報提供が行われること
- ④ 認知症カフェに来場する誰もが役割を得る機会を持つこと
- ⑤ 展開される活動は認知症一次予防^{*}ではなく、二次予防を意識すること



※運営は単一ではなく複数で行われる方が継続運営の助けになる

上記は明確に分類されるものではなく、それぞれの要素や方法がその地域の実情や状況に応じて融合し重なり合い展開される。「C 主たる内容」はすべての要素を認知症カフェ運営者の工夫により、認知症の本人の声に耳を傾けたうえで、参加者すべてのニーズが満たされるよう最適なバランスを取りながら行われることを目指すものである。

※認知症予防の考え方：「一次予防」は危険因子の出現していない、あるいは出現時に認知症の発症リスクを軽減する予防対策。

「二次予防」は早期発見・早期対応を目指し認知症の知識や情報を知り、適時適切なサポートを知り、その体制を作るためのアプローチ。（ミニ講話のテーマについても二次予防の観点で組み立てることを留意したい）

これからの継続に向けた見直しポイント

Point① 認知症の人が集まらないと感じる場合

- 運営メンバーに地域住民¹⁾の参画を募る
 - ・地域の理解が得られると様々な住民の人の情報も集まる
- プログラムでは、認知症の一次予防²⁾に偏らない
 - ・認知症の一次予防は認知症の本人の参加のハードルを上げる
- カフェタイムなど会話の時間を多くとる
 - ・プログラムにあわせるのではなく、ゆっくり話をしたいという希望が多くある
- 認知症の人と家族の席を別々にし、それぞれが話しやすい環境にする
 - ・それぞれが、ここだから話せるという特別な場所にする

Point② 認知症カフェの継続に不安がある場合

- 地域の公民館、自治会館、コミュニティセンターなど地域の施設を利用
 - ・感染症などでの休止のリスクを減らす
- ミニ講話²⁾などを設け柱になるプログラムをつくる
 - ・継続のために先々の予定は継続の目標にもなる
- 地域住民や地域のボランティア団体などに運営に携わってもらう
 - ・多様な主体の運営者は理解者増加につながり活動継続の助けになり、負担も軽減する
- 認知症の一次予防だけに偏らない²⁾
 - ・一次予防は来場者の獲得につながるが、認知症の人が訪れにくい活動になる可能性がある。専門職や地域住民との出会い、情報共有、早期支援へのきっかけの場となることを大切にする

Point③ 継続とリスタートに向けたチェックリスト（参照先）

- 誰のために、何のために認知症カフェが必要なのかを自治体担当者や運営者、認知症の人と一緒に話し合う機会を定期的に設ける（2章3. 認知症カフェのビジョンと達成のためのポイント）
- 自分たちの認知症カフェの運営のタイプを運営メンバーと一緒に整理してみる（2章4. 認知症カフェの類型）
- チラシにはそれぞれの認知症カフェの目的を短く簡単に記載する（2章5. 地域で認知症カフェが開かれることにより期待される成果）
- 地域住民に認知症カフェに来ると何が得られるのか、どんな場所なのかを分かりやすく周知する（2章5. 地域で認知症カフェが開かれることにより期待される成果）
- 運営者の中で、運営者の役割を再確認し準備する（2章6. 認知症カフェの価値を高めるために必要な運営者に求められる配慮と準備）

1) 地域住民の参画の際には、市区町村自治体などと連携し認知症カフェの趣旨や目的について理解いただく機会や研修の開催などが行われることが望ましい。研修は、他の認知症カフェへの参加・交流なども有用。

2) 認知症予防の考え方：「一次予防」は危険因子の出現していない、あるいは出現時に認知症の発症リスクを軽減する予防対策。「二次予防」は早期発見・早期対応を目指し認知症の知識や情報を知り、適時適切なサポートを知り、その体制を作るためのアプローチ。（ミニ講話のテーマについても二次予防の観点で組み立てることを留意したい）